

【DEBATE】

II 単腎に発生した小径腎細胞がんに対する治療戦略
～適応と限界～ロボット支援腎部分切除
が最も優れた方法である

KEY WORDS

- 腎細胞がん
- ロボット手術
- 腎部分切除
- 単腎

東京女子医科大学東医療センター泌尿器科 近藤 恒徳

はじめに

単腎に発生した腎細胞がんに対する治療では、がん制御もさることながら透析をできるだけ避けるような治療を行うことが非常に重要である。小径腎がんに対してはいくつかの治療法の選択が可能となっているが、以前から行われているのは腎部分切除である。術後生存率や腎機能温存にも優れていることが報告されるようになり、こうした単腎などのimperative caseだけでなく、対側腎が正常な通常選択例にも適応が広がっていった¹⁾²⁾。単腎例に対しては開腹腎部分切除(open partial nephrectomy : OPN)が多く行われていたが、こうした高リスク症例に対しても低侵襲手術として腹腔鏡下手術(laparoscopic partial nephrectomy : LPN)が行われるようになった³⁾。し

かしながら腹腔鏡下の縫合切除の難易度が高いことから、単腎例では合併症や急性腎障害(acute kidney injury : AKI)の発生率も高く、OPNのほうがまだ安全であるとも報告されていた⁴⁾。

近年ロボット手術が腎部分切除に導入されるようになると、LPNよりも低い合併症率、優れた腎機能温存効果が報告され⁵⁾⁶⁾、OPNとほぼ同等の成績が報告されるようになった⁷⁾。その結果、単腎例に対してもロボット支援腎部分切除(robot-assisted partial nephrectomy : RAPN)にも行われるようになり、その安全性が報告されるようになってきた⁸⁾⁹⁾。われわれも多くのRAPNの経験をするようになり、単腎症例に対して少しずつ適応を拡大するようになってきた。その結果、基本的にはまずRAPNを第一選択に考慮するに至っている。

Robot-assisted laparoscopic partial nephrectomy as the best treatment option for RCC tumors in solitary kidney.

Tsunenori Kondo (教授)